
思い出ガール

夏野 狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出ガール

【Nコード】

N1368S

【作者名】

夏野 狗

【あらすじ】

OLさんがある日の帰りのエレベーターでなんかおかしいことを体験するお話です。

「はあ……、疲れたー。部長もどうしてあんなうるさいかねえ……」
ヒールをコツコツと鳴らし、自宅マンションに今日も帰ってきた。
何も楽しいことはない　いつもの日常。

私が住んでいるマンションは十一回建ての、そこそこ立派なマンションだ。毎日上司に文句ばかりを言われ早数年。やっと、小さなアパートから、一人暮らしには少し広すぎる3LDKへ引っ越してきた。

今日も散々上司に愚痴愚痴と言われ、イライラしている。時刻も既に二十二時になるうとしている。温かい珈琲でも飲んで、お風呂へ入ってさっさと寝てやろう　そう思い、エレベーターのボタンを押し、扉が開いた。

「今晩は、逢阪様。本日は思い出エレベーターへようこそ」
そう、頭を下げる女性。

……自分は夢でも見ているのだろうか？　確かに自分は家へと帰ろうとしていたところだと思っただが　その女性を見るからに、エレベーターガールであった。もちろんというかなんというか、私はエレベーターガールなど実際に見たことはないのだが、私がどこかで見て覚えたエレベーターガールそのものであった為、エレベーターガールにしか見えない。

「思い出……エレベーター？」

なんとも……阿呆らしいと言うか……。罰ゲームか何かだろうか。
「はい。間も無く上へ参りますので、どうぞ」

「はあ……」

私はさっさと家へ帰りたいのだから、ここはあえてノータッチでいこう。この人もきつと罰ゲームか何かだろうし、触れない方がきつと彼女の為だ。

私は大人しく、その奇妙なエレベーターガールがいるエレベータ

「へ乗り込んだ。私が住んでいる階は七階だから七階のボタンあれ？ おかしいな。」

そう。明らかにおかしかった。私はマンションを間違えたのかと思った。なぜなら、エレベーターのボタンは二十四階まであったからだ。私が住んでいるマンションは十一階。二十四階まであるような高層マンションには住んでいない。　　だったら、ここはどこだ？

私がマンションを間違えた可能性が高いだろう。

「ちょっとすみません。降りていいですか」

エレベーターの扉を見つめている格好の彼女に声を掛ける。

そう言えば、彼女はボタンを押していただろうか？ エレベーターが動いている感覚はある為、上へ上がっていることは確かなのだからうけど。彼女が邪魔で、きちんと見えず確認していなかったが、オレンジ色に光っているボタンがある。やはり、彼女は何回かのボタンを押していたのだ。彼女を避けて、そのボタンの数字を確認する。　　0？ オレンジに光るボタンの数字は、0だった。

「申し訳御座いません、逢阪様。このエレベーターは降りることは無理なのです」

ここでやっと私は、おかしいどころではなく、異常なのだと気付いた。

彼女は私になんと声をかけた？ 「今晚は、逢阪様」と言った。

私は別に名前が分かるような物は現在見につけていない。ならば、彼女はどこから私の苗字が逢阪であると知ったのだろうか？

そして、私がマンションを間違えたのかと思っただが冷静になつてみるとそんなわけもない。私は特に酔っ払っているわけでもないし、そしてなにより、　　このへんに二十四階もある高層マンションは無い。

バッグから携帯を取り出してみる。圏外どころか、画面が真っ白だった。

「ちよつ、降ろしてよ！ 私は家へ帰るのよ！」

零から二十四まで並んだボタンの一を押してみるが、何の反応も

ない。相変わらず、0と書かれた数字だけがオレンジ色を帯びている。

その様子を平然と眺める、エレベーターガール。まるで、どうにもならないことを知っているかのように。

「間も無く、零階へ到着致します」

私の焦りが大きくなつたとき、あのエレベーターガール独特の高い声でそう告げられた。途端、目の前の扉は開いた。

赤ん坊……？ 見慣れない、一歳にも満たしていないだろう小さな赤ん坊が、私たちの前に四つん這いの形で居た。正直、なにが起こるのかとビクビクしていたが、ある意味予想を裏切られての赤ちゃんであった。赤ん坊の横から、両親らしき二人の人間が現れた。ニコニコと笑って、赤ん坊を見つめる姿になぜか私はイライラした。

「ユリ、おいで」

親が子供の名前を呼んだ瞬間、扉は閉じた。

子供のなま え。偶然なのか、私と同じ名前だった。

そうではなく、私はここから降りたいのだ。疲れているし、さつさと帰って休みたい。けれど、そう思いつつ私は、降りれないであろうことに薄々気付いていた。彼女は何もしゃべらず、沈黙が続く中、私はいつまでここへ閉じ込められているのだろうかと思つた。

「一階から五階までは、飛ばせていただいでよろしいでしょうか？

逢阪様」

私は何も言わなかった。

さつさと終わってくれるならどれだけでも飛ばして構わない。この理解不能な現象を早くどうにかしてほしい。

私の沈黙をイエスと受け取ったのか、彼女は「六」と書かれた数字を押した。

ガーツという音を立てて、六階であろう場所で開く扉。

「ユリ、六歳の誕生日おめでとう！ ママとパパからのプレゼントよ」

そう言つて、先ほど見た両親であろう二人と、見たところ五、六歳の女の子がテーブルを囲んでいた。そのテーブルの中心には、大きなケーキと、そのケーキに刺さる蠟燭があつた。

大きな箱を渡され、嬉しそうに微笑む女の子。誕生日プレゼントなのだろう。その姿を、嬉しそうに、ただ、幸せそうに見つめる両親。

そこで、扉は閉じた。

「次は、十階へ参ります」

私に後姿を向けたまま、彼女はそう言つた。カチリ、と小さな箱の中でボタンを押す音がやたらと大きく聞こえた。

そしてまた、扉は開いた。

そこには、先ほどと変わらないテーブルと、ケーキ。今日もまた、彼女の誕生日なのだろう。けれど、父親の姿は無かつた。

「ユリ、今日パパは遅くなってママしかいないけど我慢してね」

「うん。ユリはママがいれば幸せだよ。もちろんパパも好きだけだね」

無邪気な笑顔で、母親へ笑いかける女の子。

大きな熊のぬいぐるみを、母親が女の子へ渡していた。女の子は変わらず、ニコニコと笑顔でもとても幸せそうところで扉は閉じた。「次からは、十一階から二十三階までの階全てに止まります」

十一階から十四階まで、どこにでもありふれていそうな、幸せそうな家族の姿があつた。

公園で楽しく過ごしている姿、海で、山で、楽しくはしゃぐ姿、休日在家で家族みんなでのんびりとすごしている姿。とても楽しそうで、幸せそうだった。そしてそれを見る度、私のイライラは増していった。

「あなたっていつもそうよね！ そうやって私に嘘ばかり吐いて！」

「嘘じゃないって言うてるだろう！ 信じてないのはお前だろ！？」

扉が開いた瞬間、怒鳴り声が聞こえた。それは、先ほどまで幸せそうに笑っていたあの二人であった。 此処は、十五階……。

「もう私は疲れたわよ……」

「ああ、俺もだよ……っ」

うな垂れる二人の後ろの扉で、女の子がその姿を悲しそうに見つめていた。今にも泣き出しそうな、辛い顔。 嗚呼、この顔は知っている。これは……。

そんな、三人とも複雑な顔をしたまま、扉は閉じた。

「どうかされましたか、逢阪様？ もしや、気付かれましたか？」

「っ……。なにが……したいんですか」

明らかに不機嫌であると、態度で示す私。

「此処は、逢阪様の思い出を巡るエレベーターでございます」

「そんなの見れば分かるわよ」

正直言うと、十階の辺りから……いや、もしかしたら0階から気付いていた。

「そうじゃなくて、なにがしたいのよ。こんな……っ！」

思い出したくも無い。

「逢阪様に大切なことを思い出していただくと思ひまして」

すました顔してそう言う彼女に、平手打ちでもしてやるうかと思つた。イライラする。まだ十六階だ。あと十階もあるうえに、果たして二十四階に着けば終わるのかなんて分からない。

「あまり怒らないほうがよろしいですよ、逢阪様。美人が台無しです」

「お願い、それ以上口を開かないでちょうだい」

すると彼女は大人しくなった。

「ユリー、ねえねえ、今日の放課後あそこのお店行こうよ」

「おー、いこっかー」

高校の制服に身を包んだ私。近くには、見慣れた顔の学友がいる。友達に囲まれて嬉しいらしく、ニコニコとしている。

「ユリ今日いつ帰るの?」

「あー、いつでもいいや」

私だからこそ、この言葉に嘘があることを知っている。 本当は、帰りたくなんかないのだ。

「よし、今日はユリのおごりだー」

「え、ちよ。何勝手なこと言ってるのよー! こら、逃げないのー!」

もう、懐かしいと思う光景。

扉は閉まり、十七階のボタンが押される。

「ただいまー」

「遅いわよ、ユリ」

母さんが、リビングから顔を覗かせる。

「もー、うるさいなー。まだ九時だよ?」

「もう九時よ。まったく……」

呆れた顔をする。私はそのまま自分の部屋へと向かった。

玄関には、私と母の靴しか並んでいなかった。 ああ、このと

きはもう既に父親はいなかったのだ。

「随分、内容の薄い思い出でしたね」

「……」

このエレベーターガールはなんて腹の立つ女なのだろう。

十八階で開く扉。

そこには、無表情に本を読む私の姿があった。ここは確か、学校の図書館だ……。そうか、十八のときに私は……。

静かに本を見つめた私だけの姿で、扉は閉じた。

「先ほどよりも、より一層薄い思い出でしたね」

「……うるさいわよ」

「随分暗い学生生活を送っていらしたようですね。友達には恵まれていたように見えたのですが」

「……うるさいって言うてるでしょう。黙らないと本当にその舌、切るわよ」

そう言つと何も言わず、静かになった。このエレベーターガールはいちいち脅さないと黙つてくれないのだろうか。十八歳のとき、私は既に一人だった。それというのも、いじめが原因だった。たぶん、些細なことが原因でそうなった。今となつてはもつとどうでもいい話だ。

十九、二十、二十一、二十二の階それぞれが、すごく内容が薄いものであった。

「如何でしたか、本日の思い出巡りは」

二十三階へ向かうエレベーター内で話しかけてくる。あれだけ脅したにも関わらず、しばらく経つと平然と話しかけてきた。

「べつに。あなたのせいで嫌なことばかり思い出したわ」

「それはなんとも残念な結果です」

「そうね」

少しずつ年を取り、大人になっていく自分。しかし、その姿には笑顔の一つも無かった。

「これが最後の階、二十三階になります。どうぞごゆっくり」

「もしもし、ユリ?」

「なによもう……。仕事の邪魔しないでよ母さん」

自室で、パソコンをいじっていた私への電話。

「仕事って、今日休日なんじゃないの? あんまり無理しちや駄目よ」

「べつに用もないなら切つていい?」

冷たく言い放ち、溜め息を吐く。電話越しに、母の息を呑む音が聞こえた。

私はまた溜め息を吐き、何も言わず電話を切った。

扉は、そこで静かに、終わりを告げるように閉じた。

「本日は、誠にありがとうございました。どうぞごゆっくり、お休みくださいませ」

頭を下げる、エレベーターガール。やっと終わりか。まったくもって、疲れているのに何時間も意味不明なことに付き合わされた。

「やっと帰れるわけね。まったく、無意味な時間を過ごさせられたわ」

静かに、エレベーターを上へと上昇し、きつと今に二十四階に着いて私は解放されることだろう。

「無意味、ですか。それは逢阪様が決めることです。逢阪様が無意味だと思ったのなら、申し訳ございません。しかし、このエレベーターは人生同様、決して戻ることできません。人生も、エレベーター同様、時には流れに身を任せ、上へと昇ることしかできません。

逢阪様、あなたはいつから、笑わなくなつたのですか？」

ポーンという、二十四階へ着いた合図があつた。扉は開いた。私は自然と足を踏み出し、エレベーターから降りた。

私が降りた所を見渡すと、始めにあの変なエレベーターに乗り込んだ、私が住んでいるマンションだった。振り返ると、エレベーターが。

「あなたはいつから、笑わなくなつたのですか？」。

そつだ。私はいつから、小さいときに今の自分から見ても眩しいほどの笑顔を失つたのだろう。笑いたくても笑えなかつただけかもしれない。けれど、きつと 自分から笑わなくなつていたので。

もうあんな目に合うのは御免だと思い、階段を使い七階まで上がっていく。今エレベーターに乗り込んでも、あのエレベーターガールが現れないことに確信は持っていたが、やはり安全策で階段を上

がった。

久しぶりにこんなにも運動をした。階段を上がるということは、案外疲れるものだ。まして、七階までという結構距離がある。半分足が笑っている状態で、自室の鍵を開ける。やっと我が家へ帰れた。明かりを点け、時計を見る。二十二時十分ほどだ。家の受話器を取り、番号を押す。　　母さんはまだ、起きているだろうか。

「もしもし、母さん？　こんな時間にごめんね。あ、いや、特に何もないんだけど、元気かなって。

今度さ、母さんの所へ行こうと思うんだけど、一緒に鍋でもしない？」

あなたはいつから、心からの笑顔を失くしていますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1368s/>

思い出ガール

2011年4月2日02時40分発行